

適応指導教室の支援学生及び指導員における現実自我と 支援活動時のイメージ自我の変容

野々口浩幸・豊嶋秋彦 教育学部附属教育実践総合センター

要旨

適応指導教室に通う不登校児童生徒に支援学生や指導員がどのような自我状態でかかわっているのかを明らかにするために、4月、7月、12月の3時点で対象者の日常的な自我状態(現実自我)と、適応指導教室で不登校児童生徒とかかわる際の自我状態(イメージ自我)の二つをTEGで調べ、その特徴と変容を検討した。その結果、①現実自我・イメージ自我とも常に、NPが最大の粗点平均値を示した。②現実自我は変容に乏しかったが、イメージ自我では有意にCPが低下し、NPとFCが上昇した。③エゴグラム・パターンでは、イメージ自我においてM型の者が最も多く、次にN型が多かった。④イメージ自我の「ピーク・エゴグラム」がNPの者が最も多く、一方、「ボトム・エゴグラム」はACの者が最も多く、NPまたはFCが「ボトム・エゴグラム」である者は、3時点全てで皆無だった。以上から、適応指導教室において不登校児童生徒とかかわる際にはCPを抑える一方で、特にNP、次いでFCを強調する構えが形成されていることが示された。

【キーワード】 適応指導教室 支援学生・指導員 TEG 現実自我 イメージ自我

I 問題と目的

文部省(文部科学省)は不登校対応の一環として、平成2年度、適応指導教室事業(事業名称の適応指導教室は平成15年に「教育支援センター」に変更)を開始し、平成4年には初等中等教育局長通知で“学校以外の場所に登校拒否の児童生徒を集め、学校生活への復帰を支援するため様々な指導・援助を行う「適応指導教室」について、その設置を推進するとともに、指導員や施設設備等の充実に努めること”を指示し、平成15年には文部科学省の「適応指導教室整備指針(試案)」では、“不登校児童生徒の集団生活への適応、情緒の安定、基礎学力の補充、基本的生活習慣の改善等のための相談・適応指導(学習指導を含む。以下同じ。)を行うことにより、その学校復帰を支援し、もって不登校児童生徒の社会的自立に資することを基本とする”と、その目的を明らかにしている。

しかし文部科学省(2009)によれば、小・中学校の不登校児童生徒数は平成20年度が126,805人、在籍児童生徒に占める不登校者数の割合は平成19年度が過去最高を記録した(図1)。こうした中で適応指導教室の全国的な実情はどのようなのだろうか。文部科学省(2010)によれば、平成20年度は機関数1241、指導員数が4257と、いずれも前年度から増えているものの、指導員は都道府県設置で非常勤49.1%、市町村設置で非常勤76.4%と、非常勤職員に多くを依存し、しかもこの1年で常勤が減り非常勤が増加しており非常勤依存が強まっている(表1)。非常勤依存については10年以上前に相馬・花井・倉淵(1998)が、“全国各地の適応指導教室で最も苦慮しているのが「人」の問題である。適応指導教室では、常勤職員を得ることができずに非常勤職員で運営せざるを得ない状況”と指摘したが、それが解決されていないのである。臨時スタッフを含む適応指導教室スタッフの詳細を調べた谷井・沢崎(2002)によれば、1施設当たり常勤職員数1.54人に対して非常勤・臨時が計4.37人と、やはり非常勤・臨時に大きく依存していることがわかる。しかも、平成4年初等中等教育局長通知で言う“集団生活への適応、情緒の安定”を図るには心理系職員の配置が望ましいと思われるのに、常勤・非常勤を合わせても1施設当たり0.32人に留まる(表2)。その一方で、「運営方針として重視している順位」は、上位から順に「自

主性・自律性を育てる」「自己の自信を回復させる」「対人関係の能力をのばす」であり、「学校復帰に向けた準備を整える」（第7位）や「学習面の遅れがないように準備する」（第8位）を凌いでいた。ここから谷井・沢崎（2002）は，“直接学校復帰を目指すというよりも彼らに足りないものを育てることの方がもっと重要だという認識が広まってきている”と考察している。

以上から明らかなのは、第一に、適応指導教室の重要な担い手となっている非常勤や臨時のスタッフの育成が課題になるということであるが、そのためには、「不登校児童生徒サポーターにおけるサポート体験を通じた変容・職業的発達」の実証的研究が必須になる。しかしこの研究は少なく、PAC分析と詳細な面接によって全人的変容にアプローチした長谷川（2002）、長谷川・種市・豊嶋（2002）、豊嶋・長谷川・加川（2002）、豊嶋・近江・斉藤（2004）、豊嶋（2009, 2010, 2011）、アイデンティティ変容の観点から調べた菊池・豊嶋（2006）のほか、適応指導教室に派遣された教師の体験構造にPAC分析で迫った佐藤（2004）など、我々の一連の研究以外には見いだしがたい。それらにおいても、一定の尺度を使った横断的研究はなされていない。全国的に適応指導教室の非常勤・臨時スタッフへの依存が強まっている中で、彼等の変容を一定の尺度によって追跡する意味は大きい。

第二に、初等中等教育局長通知が指摘する集団生活への適応、情緒の安定、谷井・沢崎（2002）が見いだした自主性・自律性、自信の回復、集団生活能力の改善が適応指導教室に求められるとしたら、非常勤・臨時スタッフもそれらを引き出すことのできるスキルや交流パターン、パーソナリティを発達させねばならない。

交流パターンとパーソナリティを簡便に測定できるのが、エゴグラムである。そこで本研究は、東大式エゴグラム（新版TEG II，以下「TEG」）を用いて、2つの適応指導

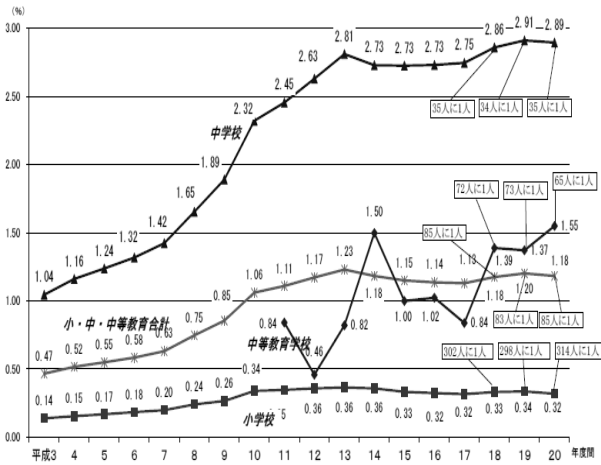


図1 「不登校」の比率 (文部科学省 2009)

表1 教育支援センター(適応指導教室)指導員数 (文部科学省 2010)

区分	機関数(箇所)	指導員数						
		常勤		非常勤		計		
		人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)	人数(人)	割合(%)	
都道府県が設置	19年度	21	72	52.9	64	47.1	136	100.0
	20年度	21	54	50.9	52	49.1	106	100.0
市町村が設置	19年度	1,188	1,045	25.7	3,014	74.3	4,059	100.0
	20年度	1,220	978	23.6	3,173	76.4	4,151	100.0
計	19年度	1,209	1,117	26.6	3,078	73.4	4,195	100.0
	20年度	1,241	1,032	24.2	3,225	75.8	4,257	100.0

表2 指導職員の内訳 (谷井ら 2002)

(347施設)	人数 (%)	1施設あたりの人数
総 計	536(100)	1.54
(a) 教育系職員	187(34.9)	0.54
(b) 退職教職員	217(40.5)	0.63
(c) 行政職系職員	68(12.7)	0.20
(d) 心理職系職員	18(3.4)	0.05
(e) その他	46(8.6)	0.13
非 常 勤 職 員		
(347施設)	人数 (%)	1施設あたりの人数
総 計	818(100)	2.36
(a) 教育系職員	152(18.6)	0.44
(b) 退職教職員	441(53.9)	1.27
(c) 心理職系職員	98(12.0)	0.28
(d) 医師	14(1.7)	0.04
(e) 医師以外の医療関係者	1(0.1)	0.00
(f) その他	111(13.6)	0.32
不 明	1(0.1)	
臨 時 ス タ ッ プ		
(347施設)	人数 (%)	1施設あたりの人数
総 計	697(100)	2.01
(a) 学生・院生	470(67.4)	1.35
(b) 学生以外のボランティア	171(24.5)	0.49
不 明	56(8.0)	

教室の非常勤指導員や学生支援員における4月から12月までの変容について、自我状態の得点、エゴグラム・パターン、ピーク・エゴグラムとボトム・エゴグラムという3つの観点から調べる。その際、対象者の日常的な自我状態を「現実自我」、不登校児童生徒と関わる際の役割としての自我状態を「イメージ自我」として、両者を比較しながら変容を捉えていく。なお、2つの適応指導教室では共に、非常勤指導員や学生支援員に対して、児童生徒の内面を読み取り、受容・配慮・共感することと、関係づくりが重要であることを活動開始時点から筆者たちがしばしば伝えているので、イメージ自我のNPが高まると仮説できる。

II 対象と方法

調査対象は、弘前市学校適応指導教室で週1回通年で支援を行う弘前大学教育学部の3・4年生17名（男性3，女性14）の支援学生と、青森県総合学校教育センターの適応指導教室（こころの教育相談センター）に勤務し週1～3日の支援を行う指導員12名（男4名，女8名；学生5，大学院生1，一般成人6）の計29名である。うち、調査年度から支援活動に従事した者は17名であり、12名は既に1～3年の支援歴を持つ。調査実施がずれ込んだ者と未提出者を除いた有効資料数は男性6，女性18の計24名である。今回は有効資料が少ないので、支援歴の違いや所属適応指導教室の違いによる分析は行わない。

調査年度の4月，7月，12月の3回，「普段の自分と，適応指導教室で児童生徒と関わっているときの自分の二つについて，チェックして下さい」という指示によって，「現実自我」と「イメージ自我」の二つを回答させた。なおTEGは，5つの自我状態（CP，NP，A，FC，AC）の尺度値粗点をパーセント値に換算して解釈していくものであるが，今回は，男女コミで分析するため，平均値を扱う際には粗点を見ていく。

III 結果

1. 現実自我とイメージ自我の変容

現実自我・イメージ自我の粗点平均値とその推移を図3・4に示す。パーセント値に換算しても二つの自我とも3時点全てで自他肯定のM型になるが，12月の現実自我は，NPが最も高くCP・A・FCも50パーセントを超える「健全パターン」とされるもの（TEGで言う「NP優位型」と「台形型a」の中間型）に近かった。

二つの自我と調査時期（4月，7月，12月）による2要因分散分析の結果を表3に，自我状態ごとの推移を図5～9に示す。AとACでは主効果も交互作用も見出せないが，CPでは交互作用が認められ（ $F=4.02$ ， $p<.05$ ），CP，NP，FCで主効果が認められた。現実自我のCPはイメージ自我より高い（ $F=4.33$ ， $p<.05$ ）が，図5のように，7月にはイメージ自我では低下して一旦差が縮まっていた。NPではイメージ自我が現実自我より高い（ $F=9.87$ ， $p<.01$ ）。イメージ自我のNPが高まるという当初仮説は支持された。FCはイメージ自我が現実自我より高く（ $F=7.12$ ， $p<.05$ ），かつ，7月に一旦低下し12月には4月の水準に戻っていた（ $F=6.25$ ， $p<.01$ ）。

以上から，支援活動中の対象者は，父性的管理的指導的なCPの発現を抑える一方で，母性的保護的共感的なNPと自由・率直な「遊びごころ」としてのFCを前面に出して関わっていることが示唆される。これらは，不適応的抑圧的で活動性が低下している児童生徒を包み込みながら，児童生徒の自由な表出と活動性を促す機能を持つであろう。

では，7月に，CPにおける現実自我の低下によるイメージ自我への接近現象，FCにおけるイメージ自我の低下現象が認められるのに，12月になるとそれらが消えるのはなぜだろうか。4月から3ヶ月間の，NPを強調した支援体験が，日常生活でのCPを押し下げ，NP役割への焦点付けが，自由さとしてのFCを阻害したことが低下をもたらしたかも知れない。他方，M型の現実自我が12月にかけて「健全パターン（パーセント値換

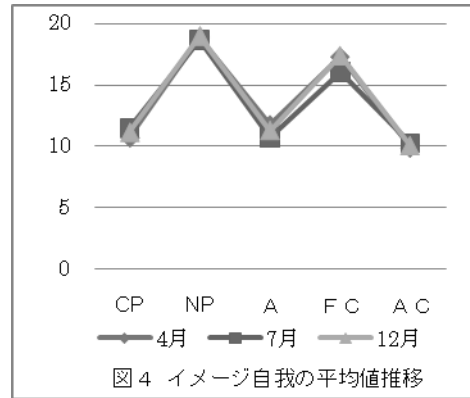
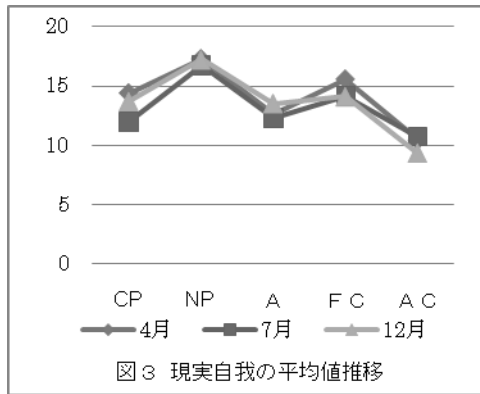
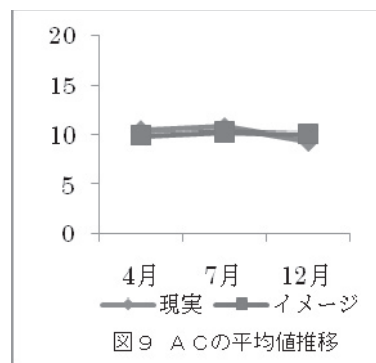
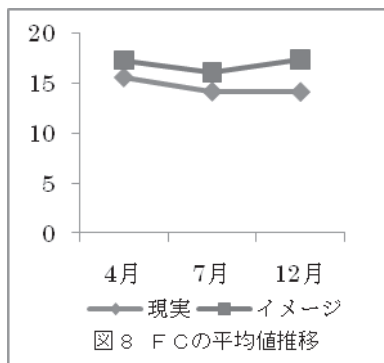
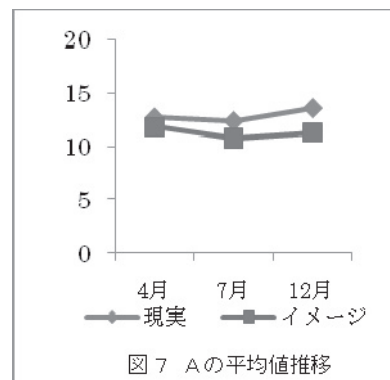
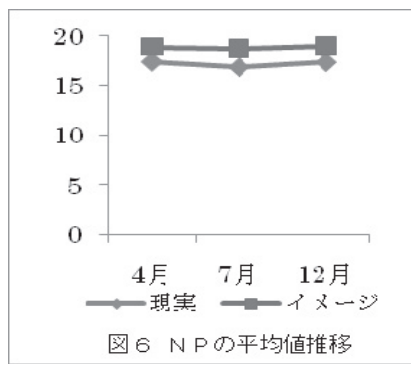
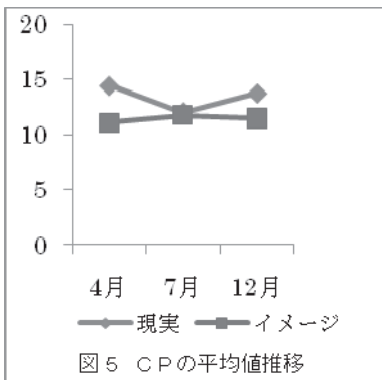


表3 現実自我とイメージ自我の分散分析および多重比較結果 (N=24)

		4月		7月		12月		主効果		交互作用
		MEAN	(SD)	MEAN	(SD)	MEAN	(SD)	自我 F 値	時間 F 値	
CP	現実	14.42	(4.69)	12.00	(4.19)	13.71	(4.28)	4.33*	1.21	4.02*
	イメージ	10.75	(3.93)	11.50	(4.08)	11.13	(4.00)			
NP	現実	17.29	(2.24)	16.75	(2.75)	17.25	(2.70)	9.87**	1.37	0.18
	イメージ	18.88	(1.33)	18.67	(1.62)	19.00	(1.85)			
A	現実	12.67	(5.06)	12.33	(5.84)	13.54	(4.61)	1.74	1.70	0.95
	イメージ	11.79	(3.10)	10.75	(4.36)	11.29	(3.36)			
FC	現実	15.48	(2.77)	14.17	(3.74)	14.13	(4.01)	7.12*	6.25**	2.52
	イメージ	17.29	(2.76)	16.04	(3.24)	17.38	(2.63)			
AC	現実	10.46	(4.48)	10.75	(5.73)	9.33	(6.35)	0.01	0.98	0.73
	イメージ	9.92	(4.53)	10.25	(5.12)	10.04	(5.22)			

* $p < .05$, ** $p < .01$



算)」に近づいたのは、「観察・分析し論理化する自我」であるAの強まりがもたらしたものである。この「分析し論理化する自我」が、「児童生徒に関わる際には、NPだけではなくCPもFCもやはり必要である」との認知をもたらし、それが7月の特徴を解消に向かわせたと解釈できそうである。

2. エゴグラム・パターンの変容

現実自我は、M型が最も多く（4月28%、7月16%、12月32%）。次に、自己犠牲的な優しさが特徴とされるN型（4月12%、7月16%、12月16%）が多い。また、自己肯定のN優位型が4月と7月の1名（4%）から12月には20%と増えた一方で、他者否定の逆N型は4月と7月の24%から12月8%と減少した。自他否定のW型は4月12%、7月16%、12月8%である。

イメージ自我でも、M型が最も多く（4月72%、7月60%、12月68%）、次にN型（4月20%、7月28%、12月20%）が多い。他方、逆N型は4月の2名（8%）から7月と12月は0に減少し、W型は7月に1名（4%）現れただけだった。

このように現実自我とイメージ自我の双方においてM型とN型がほぼ90%と、圧倒的多

		現実自我			イメージ自我			
		4月	7月	12月	4月	7月	12月	
優位型	1	CP優位型 (がんこおやじタイプ)		1(4%)	1(4%)			
	2	NP優位型(世話やきタイプ)	1(4%)	1(4%)	5(20%)	1(4%)	1(4%)	
	3	A優位型(コンピュータタイプ)				1(4%)		
	4	FC優位型 (自由奔放タイプ)	1(4%)					
	5	AC優位型 (依存者タイプ)					1(4%)	
低位型	6	CP低位型 (ルーズタイプ)						
	7	NP低位型 (かんしゃくもちタイプ)						
	8	A低位型 (現実無視, 白日夢タイプ)	2(8%)					
	9	FC低位型 (忍の一字タイプ)			1(4%)			
	10	AC低位型 (管理者タイプ)			2(8%)			
混合型	11	台形型a (マイホームタイプ)		1(4%)				
		台形型b (ボランティアタイプ)						
		台形型c (自己中心タイプ)						
	12	U型a(葛藤タイプ)						
		U型b(爆発タイプ)						
		U型c (いじけタイプ)						
	13	N型a (お人よしタイプ)	3(12%)	3(12%)	3(12%)	2(8%)	5(20%)	5(20%)
		N型b (おふくろタイプ)		1(4%)		2(8%)	2(8%)	
		N型c (ワーカホリックタイプ)			1(4%)	1(4%)		
	14	逆N型a (孤高の人タイプ)	4(16%)	5(20%)				1(4%)
		逆N型b (プレイボーイタイプ)	1(4%)		2(8%)			
		逆N型c (思い込みタイプ)	1(4%)	1(4%)		2(8%)		
	15	M型 (がき大将タイプ)	7(28%)	4(16%)	8(32%)	18(72%)	15(60%)	17(68%)
	16	W型 (厭世タイプ)	3(12%)	4(16%)	2(8%)		1(4%)	
	17	平坦型a (モーレツタイプ)				2(8%)		
	18	平坦型b (凡人タイプ)						
	19	平坦型c (引きこもりタイプ)						

タイプ名は『新版TEG II 解説とエゴグラム・パターン』・『新版エゴグラム・パターン』を参考に作成

数を占める。この2つの型に共通するのは他者肯定という基本的構えであり、子どもたちを主体とした、クライアント中心のかかわりをしていることを推測させる。

また、一貫して、M型とN型が現実自我よりもイメージ自我で多くなっていることは、もともと他者肯定であった者が支援活動では他者肯定性を一層強め、さらに、FCも強めて自己肯定の構えも顕していることが窺える。

なお、TEGではエゴグラム・パターンを27に分類できるが、24名の現実自我とイメージ自我のパターンを、参考資料として表4に整理した。表の中で各型に括弧書きで付した「タイプ」は、東京大学医学部心療内科TEG研究会(1995,2006)に依拠した。

3. ピーク・エゴグラムとボトム・エゴグラムの特徴

最も高い自我状態(ピーク・エゴグラム)は個人が最も顕しやすい自我状態であり、集団について、各自我状態をピークとする者の割合によって、集団のピーク・エゴグラムを描くことができる。最も低く顕しにくい自我状態(ボトム・エゴグラム)についても同様である(新里・水野・桂・杉田 1986)。この両者から対象者の集団としての特徴を検討する。ただし、複数の自我状態の得点と同じになった場合は、それぞれに計上した。

(1) ピーク・エゴグラム

ピーク・エゴグラムを図10・11、表5・6に示した。現実自我ではNP(4月41.4%、7月37.5%、12月51.55%)が最も多い。イメージ自我ではNP(4月65.7%、7月72.7%、12月65.6%)、次いでFC(4月34.3%、7月27.3%、12月65.6%)となる。CPとAは4月、7月、12月とも0%であり、ACも4月と7月が0%であり、12月に3.1%となっている。

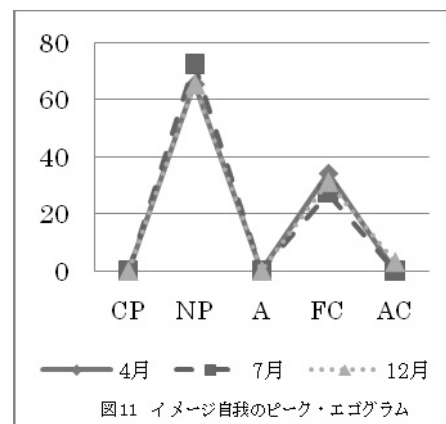
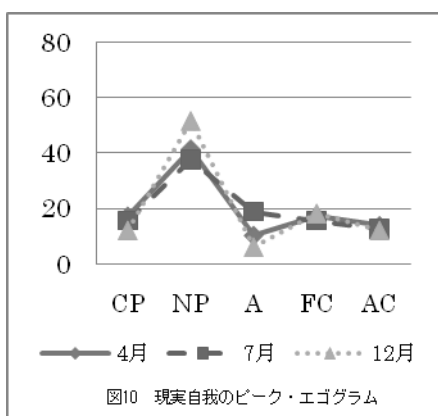
ここからも、対象者が最も発揮している自我状態がNPであり、受容・共感的なかわり、次にFCの自由な自己表出と明るさを大切にしていることが窺える。

表5 個人の現実自我ピーク・エゴグラム () 外は人数

	CP	NP	A	FC	AC
4月	5(17.2%)	12(41.4%)	3(10.3%)	5(17.2%)	4(13.8%)
7月	5(15.6%)	12(37.5%)	6(18.8%)	5(15.6%)	4(12.5%)
12月	4(12.1%)	17(51.5%)	2(6.1%)	6(18.2%)	4(12.1%)

表6 個人のイメージ自我ピーク・エゴグラム () 外は人数

	CP	NP	A	FC	AC
4月	0(0%)	23(65.7%)	0(0%)	12(34.3%)	0(0%)
7月	0(0%)	24(72.7%)	0(0%)	9(27.3%)	0(0%)
12月	0(0%)	21(65.6%)	0(0%)	10(31.1%)	1(3.1%)



(2) ボトム・エゴグラム

ボトム・エゴグラムを図12・13、表7・8に示す。現実自我では、消極性・依存性の自我状態であるACが最も多く(4月50.0%、7月50.0%、12月57.7%)、次に客観的・論

理的な自我状態のAとなった（4月 26.7%，7月 26.9%，12月 30.8%）。イメージ自我では，ACが多いことは現実自我と同じであるが，AとともにCPも相対的に多くなっている。さらに特徴的なのは，現実自我でも少なかったNPとFCは，3時点全てで0%である。

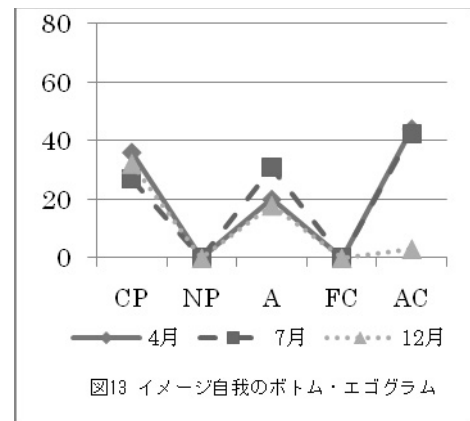
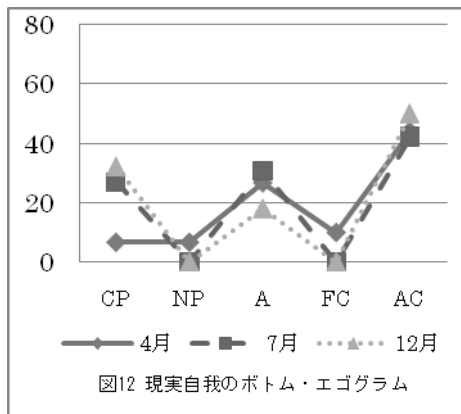
ここから，対象者にACが最も低い人が多く，消極的・依存的になることなく，また父性のCPを要求しない集団であるといえる。ピーク・エゴグラムとも関連させて述べると，対象者は消極的になることなく主体的に子どもたちのそばで，思いやりや優しさをもとにして自由な自己表出と明るさを重視する構えで関わっていることが窺える。

表7 個人の現実自我ボトム・エゴグラム () 外は人数

	CP	NP	A	FC	AC
4月	2(6.7%)	2(6.7%)	8(26.7%)	3(10.0%)	15(50.0%)
7月	2(7.7%)	1(3.8%)	7(26.9%)	3(11.5%)	13(50.0%)
12月	0(0%)	1(3.8%)	8(30.8%)	2(7.7%)	15(57.7%)

表8 個人のイメージ自我ボトム・エゴグラム () 外は人数

	CP	NP	A	FC	AC
4月	9(36.0%)	0(0%)	5(20.0%)	0(0%)	11(44.0%)
7月	7(26.9%)	0(0%)	8(30.8%)	0(0%)	11(42.3%)
12月	9(32.1%)	0(0%)	5(17.9%)	0(0%)	14(50.0%)



IV 総合考察

相馬・花井・倉淵（1998）は「適応指導教室においては，集団の中で子どもを見守りながら，個々の子どもの抱えている問題や発達の可能性を見つめ，子どもが問題を解決し自己実現が図れるよう援助していく活動である」と述べている。また，指導員の資質について文部科学省（2003）は，「集団への適応，情緒の安定，基礎学力の補充，基本的生活習慣の改善等のための相談・適応指導に必要な知識及び経験または技能，熱意と識見を有している必要」であることを指摘している。

適応指導教室に通う不登校児童生徒の多くは，人間関係づくりが苦手なために集団活動が不得意であったり，自己決定や自己を表現したりすることも苦手とすることが多い。そのため，不登校のきっかけとして人間関係での傷つき体験をもつ場合が多く，人間関係づくりやさまざまな自己肯定感を高めるための体験活動が必要である。また不登校が長期間にわたる児童生徒が多く，体力や心的エネルギーが減退しているため，その回復のための活動や学習補充も必要となる。

中川・森井・鶴田（1997）は，適応指導教室の機能として「居場所としての機能」「人間関係を学習する場所としての機能」「学習の遅れに対する補習を行う機能」「進路を決める上での援助機能」の4つを抽出した。また，中村・田上（2008）は，適応指導教室での充実感の条件として，「相談員との関係」「仲間との関係」「勉強」「活動」の4つの

条件を指摘している。その機能や充実感を図るため、支援員と指導員は温かな人間関係を通して子どもに適応指導教室における居場所を作らせ、さらに人間関係の学習や学校での学習の補習をすることによって、子どもたちは過去から未来へ、つまり今後の自らの生き方、進路ということを考え始めることができる。

本研究では、適応指導教室で不登校児童生徒とかかわる支援学生と指導員の自我状態の特徴と時間的変容をTEGを用いて検討したが、父性的な自我状態であるCPは、イメージ自我が現実自我より有意に低いことが明らかになった。CPは、理想、良心、責任、批判などの価値判断や倫理観などの父性的な厳しい部分を主とし、集団を統制するリーダーシップとしては必要な自我状態である。しかし、学校教育の中での集団を統制し、あるべき姿を求める管理・訓育的な教師によるCP的かかわりは、子どもたちのストレスともなる大きな要因のひとつでもある。そこで、支援学生と指導員は、そのCPの自我状態を低減し、一人一人の個を大切にした子ども中心のあり方に配慮しながらかかわっているものと思われる。

一方、母性的自我状態であるNPは、イメージ自我が現実自我より有意に高いことが明らかになった。対人関係に緊張や不安感をもち、心的エネルギーの低下している不登校児童生徒に対して、より受容や共感的かかわりが重要であることが示唆された。粗点平均値を見ても4月18.88、7月18.67、12月19.00と5つの各自我状態の中では最も高い値で推移した。子どもたちは、支援される際に支援学生や指導員の母性的な自我状態のNPのもとでリレーションを形成することで、適応指導教室に通うことが可能となり、少しずつ安心感を得て活動できているものと思われる。

FCは、イメージ自我が現実自我より有意に高いことが明らかになった。子どもたちと活動する際に必要な自我状態であるといえ、平均値は4月17.29、7月16.04、12月17.38と、NPに次いで高かった。

また、エゴグラム・パターンで見ても、特にイメージ自我においてNPとFCを優位とするM型が最も多い。次に自己否定・他者肯定のN型（4月12%、7月16%、12月16%）が多くなっており、受容・共感的かかわりを重視していることがわかる。それは、集団の特徴を示すピーク・エゴグラムでNPが突出して多く、次いでFCが多くなっていること、一方、ボトム・エゴグラムでNPとFCが実施した3回とも0%となっていることから、思いやりや優しさをもとにして明朗・活動性を重視した態度で子どもたちとかかわっている集団的な特徴をもつことが窺える。

不登校となった児童生徒と対応するとき、学校教育の中での父性的なかかわりであるCPの指示・命令からの緊張感から解き放たれて、まず安心感・安全感を感じ、さらに信頼感を得るためにはNPの母性的なリラクゼーション的機能を適応指導教室では果たさなければならない。そして、それまでの不安や緊張、抑うつ、無力感から回復することによって精神的な安定が図られ、さらには個々の状態に応じて成長へのための支援をする。そのために指導員は子どもたちとかかわる際に、ストレスを与えるCPを低減させる一方で、NPの上昇による母性的な受容的態度と明朗・活動性の自我状態であるFC的かかわりは、より一層優しく温かく感じられ、心的エネルギーの回復には必要な自我状態であろう。

ただし、適応指導教室に通う児童生徒はそれぞれ状態が異なるので、受容・共感のNPを基盤としながらも、適切な個別のかかわりをすることが課題だと思われる。単にNPに包まれた適応指導教室は居心地のよい、長期にわたって居続けたい場所になってしまう。ゆえに、子どもたちの成長、適応指導教室からの自立のために機能していくためには、子どもたちのそれぞれの課題や状態に応じて、客観的・論理的な自我状態であるAをもとに、子どもとともにこれからのあり方を探っていくかかわりを考えていかなければならないのではないだろうか。不登校状態にある子どもたちの回復から成長へ、臨床的かかわりから教育的支援へ——それが、適応指導教室で果たすべき役割だと考える。ただし、それはあ

くまでも子どもが主体となるべきであり、大人の側の都合で行われるべきではない。子どものペースで着実な回復と成長がはかれる支援を最優先しなければならない。

集団を通して個の活動を促進する学校教育に対して、適応指導教室では子どもたち一人一人の個の存在を大切にし、そして支援学生と指導員が仲立ちとなって子ども同士の個と個をつなげる役割を果たし、徐々に集団へと拡大する。したがって、あるがままの姿を受容するNPを優先しつつも、FCの明るい活動性が子どもたちの心的エネルギーの回復には必要な自我状態である。そして、集団の中で人間関係の在り方や自己の課題を見つめ、その子どもたちの状態を考慮しつつ、客観的・理性的な自我状態のAで、それぞれの子どもたちの課題にともに向き合っていく姿勢と具体的な個別の支援計画が必要なのではないだろうか。さらに、支援学生と指導員は不登校児童生徒の、よきモデルとなっていかなければならない。

本研究では分析対象が24名と少なく、うち18名は大学院生であり、教育的・管理的支援は不得手と思われる存在である。受容・共感のNPを基盤にしつつも、父性的なCPの役割を弘前市学校適応指導教室では指導員が、青森県総合学校教育センター適応指導教室では指導主事が果たしているの、対象者は、よりNPを重点にした関わりが可能となっていると思われる。多くの適応指導教室での運営や支援は、退職教職員や教育系職員がかかわっている割合が多い現状にあり、そのような場合、現実自我とイメージ自我のあり様は異なることも推測される。

また、長谷川・豊嶋(2001)、菊池・豊嶋(2006)は、学生の場合、適応指導教室での支援活動それ自体が現実自我に影響を与えることを示した。本研究でも支援体験を通じた現実自我に影響を与えていることが示唆されたが、今後、調査対象者を増やし、かつ調査期間を長期にとって確認することも課題となる。

V まとめ

TEGを用いて、支援学生と指導員の本来のパーソナリティの現実自我と適応指導教室で不登校児童生徒とかかわっている際のイメージ自我との比較検討を行った。

1. 現実自我よりもイメージ自我では、有意にCPが低下し、NP、FCの上昇がした。平均値で最も高かったのは、NPであった。
2. パターン分類では、イメージ自我においてNPとFCが優位なM型が60%~72%、次いで自己否定・他者肯定のN型が20%~28%と多かった。
3. イメージ自我において、集団の特徴を示すピーク・エゴグラムはNP(65.6%~72.7%)が最も多く、次いでFC(27.3%~34.3%)となった。一方、ボトム・エゴグラムにおいては、AC(42.3%~50.0%)が最も多く、NPとFCはともに調査を実施した3回とも0%であった。
4. 以上の結果より、支援学生と指導員が適応指導教室において不登校児童生徒とかかわる際には、父性のCPを低下させる一方で、母性のNPをより意識し、次にFCを発揮して子どもたちを活動していることが明らかになった。

本研究は一部、文部科学省科学研究費(挑戦的萌芽研究)の補助を受けた「大学生の適応指導教室における長期サポート体験の構造と臨床の知の獲得過程」(課題番号;20653046)の成果である。

文 献

- 1) 長谷川恵子・豊嶋秋彦 2001, 適応指導教室におけるフレンドシップ事業の効果研究, 東北心理学研究 50, 46.
- 2) 長谷川恵子 2002, 不登校生徒との関わり体験が適応支援者に及ぼす機能, 平成13年度弘前大学大学院教育学研究科教育心理学分野修士論文 (A 4 判, 全262頁).
- 3) 長谷川恵子・種市 聡・豊嶋秋彦 2002, 非専門家学生サポーターの専門職への社会化過程ー不登校支援活動を通してー, 東北心理学研究 52, 41.
- 4) 菊地春香・豊嶋秋彦 2006, 「対人支援職」志望学生におけるアイデンティティと自己の二面性, 東北心理学研究 55, 95.
- 5) 文部科学省 2009, 「平成 21 年度学校基本調査の速報について」, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/siryo/_icsFiles/afieldfile/2009/08/31/1283519_2.pdf.
- 6) 文部科学省 (初等中等教育局児童生徒課) 2010, 「平成 20 年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」, http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/12/_icsFiles/afieldfile/2010/03/12/1288459_2.pdf.
- 7) 中川厚子・森井ひろみ・鶴田桜子 1997, 適応指導教室の機能に関する研究ー中学卒業生のフォローアップー カウンセリング研究 30, 255-265.
- 8) 中村恵子・田上不二夫 2008, 適応指導教室充実感尺度・適応指導教室からの部分登校充実感尺度の妥当性と信頼性の検討, カウンセリング研究 41, 119-128.
- 9) 新里里春・水野正憲・桂戴作・杉田峰康 1986, 『交流分析入門 3 交流分析とエゴグラム』 チーム医療.
- 10) 佐藤昭雄 2004, 不登校児童生徒との関わり体験が教師に及ぼす機能, 弘前大学教育学部附属教育実践総合センター研究員紀要 2, 83-97.
- 11) 相馬誠一・花井正樹・倉淵泰佑 1998, 『適応指導教室ーよみがえる「登校拒否」の子どもたちー』 学事出版.
- 12) 谷井淳一・沢崎達夫 2002, 適応指導教室における体験的活動が不登校児童生徒の回復過程に果たす役割に関する研究 (平成11, 12, 13年度科学研究補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書).
- 13) 東京大学医学部心療内科 T E G 研究会 (編) 1995, 『新版 エゴグラム・パターン』 金子書房.
- 14) 東京大学医学部心療内科 T E G 研究会 (編) 2006, 『新版 T E G II 解説とエゴグラム・パターン』 金子書房.
- 15) 豊嶋秋彦・長谷川恵子・加川真弓 2002, 非専門家学生における適応支援者としての社会化過程ー不登校生徒の長期支援学生に対するPAC分析ー, 弘前大学保健管理概要 23, 15-35.
- 16) 豊嶋秋彦・近江則子・斉藤千夏 2004, 教員養成学と不登校生サポーターの対人専門職への職業的社会化ー方法論の検討とPAC分析を通してー, 弘前大学教育学部紀要 教員養成学特集号, 65-88.
- 17) 豊嶋秋彦 2009, 不登校ー学童期の問題と予防に向けて, 白崎けい子 (編) 『学童期のメンタルヘルス (「現代のエスプリ」503)』 ぎょうせい, 141-152.
- 18) 豊嶋秋彦 2010, 適応指導教室の学生サポーターにおける「臨床の知」の獲得過程と発達ー4年間サポートした事例の場合, 東北心理学研究 59, 81.
- 19) 豊嶋秋彦 2011, 適応指導教室の学生サポーターにおける「臨床の知」ー1年間のサポート体験がもたらすもの, 東北心理学研究 60 (印刷中).